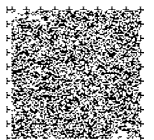


第8章



- 大会終了後、大会の思い出や感動を共有するための大会写真展を、都庁舎や都内自治体で開催するとともに、RWC2019の熱気を東京2020大会につなげる記念シンポジウムを開催した。
- また、大会を通じて盛り上がったラグビー熱を一過性のものとせず、大会後も東京のラグビー文化の定着を図るとともに、RWC2019を通じて得た様々な経験や知見を東京2020大会の成功につなげていく。

1 大会写真展

RWC2019の余韻を味わいつつ、大会期間中の思い出や感動を共有し、ラグビーの魅力を発信できるよう、読売新聞社との連携により写真パネルを作成し、都庁舎及び大会にゆかりのある都内自治体で展示した。

あわせて、東京スタジアムで試合を行った代表チームのサイン入りジャージやラグビーボールも展示した。

- ・ 都庁第一本庁舎1階東京観光情報センター
 期間：2019（令和元）年11月6日（水）～12日（火）
 展示物：大会写真パネル、代表チームのサイン入りジャージ・ラグビーボール



都庁舎内写真展

- ・ 都内自治体
 <都内自治体における写真展の実施状況>

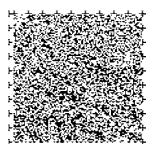
※実施順

| 自治体 | 場所 | 実施期間 |
|-----|---------------------|----------------------------|
| 三鷹市 | 三鷹中央防災公園・中央広場 | 2019（令和元）年11月3日（日） |
| 港区 | みなとパーク芝浦2階アトリウム | 2019（令和元）年11月14日（木）～20日（水） |
| 府中市 | 市庁舎1階市民談話室 | 2019（令和元）年11月22日（金）～28日（木） |
| 調布市 | 調布市文化会館たづくり1階エントランス | 2019（令和元）年12月17日（火）～22日（日） |

2 RWC2019 記念シンポジウム

日本中が熱狂に包まれた本大会を総括し、その熱気と感動を東京2020大会につなげるため、大会終了後にシンポジウムを開催した。

来場者からは、「RWC2019の成功をもとに、さらに東京2020大会も盛り上がる感じた」、「RWC2019の盛り上がり、スポーツ観戦の文化を2020年につなげていくことは非常に大切だ



と思った」などの感想が寄せられ、東京 2020 大会への期待が感じられたシンポジウムとなった。また、このシンポジウムの様子は、後日、採録記事としてまとめられ、読売新聞紙面や同社 HP に掲載された。

日 程：2019（令和元）年 12 月 12 日（木）

場 所：JP タワー ホール&カンファレンス（千代田区）

主 催：東京都、読売新聞社

内 容：①トークセッション「国際大会の日本開催成功の鍵」

大畑大介氏（RWC2019 アンバサダー）、

ヨーコ ゼッターランド氏（東京 2020 大会組織委員会理事）

②プレゼンテーション 1 「大会運営の舞台裏～ボランティアと共に～」

組織委員会ボランティア担当

③プレゼンテーション 2 「参加企業による大会での取組」

大会スポンサー セコム（株）

④アスリートセッション「From 2019 to 2020」

小笹知美氏（ラグビー女子セブンズ日本代表）、横尾千里氏（ラグビー女子セブンズ日本代表）、植草歩氏（全日本空手道連盟ナショナルチーム）、島川慎一氏

（車いすラグビー日本代表）

来場者：約 350 人



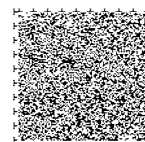
トークセッション



アスリートセッション



2019（令和元）年 12 月 25 日付 読売新聞朝刊
（一部地域除く）



3 ラグビー文化の定着に向けた取組

大会期間中、東京スタジアムやファンゾーンには多くの観客等が訪れ、応援するチームに関わらず交流するなど、大いに盛り上がり、ラグビーを楽しんでいる光景が見られた。

大会を通じて盛り上がったラグビー熱を一過性のものとせず、大会後も東京のラグビー文化の定着を図る取組を実施していく。

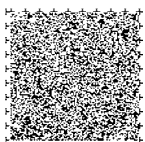
- ・ 競技団体等と連携して、ラグビーに取り組む子供たちが、ラグビーを楽しみながら一層競技力を向上させるような取組を実施する。また、大会を契機としてラグビーに興味を持った人が気軽にラグビーに触れられる機会などを提供することで、東京におけるラグビーの裾野拡大を図っていく。
- ・ 都内の公立スポーツ施設のうち、ラグビーができる施設の情報を集約し、HP等で分かりやすく情報を提供していく。
- ・ 都立公園の整備の機会等を捉えた、ラグビーができる場の確保など、庁内各局と連携して取り組んでいく。
- ・ RWC2019の盛り上がりを持続させていくため、JRFUや他の開催都市等と連携し、ラグビーの普及に向けて取り組んでいく。

4 東京 2020 大会につながる知見

RWC2019で得られた知見を、東京 2020 大会におけるラストマイル運営やライブサイト運営、ボランティア活動などの大会準備に活かしていく。

【主な知見】

- ・ ラストマイル運営
ラストマイル運営では、発生する事案に対して、迅速な状況の把握、適切な意思決定と対応が求められることから、円滑な情報収集・報告ルールを整備するとともに、配置される職員のトレーニングを行うことが重要である。
また、傷病者が発生した場合の報告要領や救護所スタッフ間の連絡方法などについても、検討が必要である。
- ・ ファンゾーン運営
ファンゾーンにおいて、当初、想定を上回る来場者があり、混雑時の誘導や入場規制など、緊急の対応を行う必要が生じた。こうした事態に備え、案内誘導スタッフや警備員の配置、入場時対応等、事前の準備を万全にするとともに、状況に応じた柔軟かつ迅速な対応が必要である。
- ・ ボランティア活動
活動後のミーティングなどで、ボランティアから出された意見を翌日以降の運営の改善につなげていくことは有用であった。ボランティアの声を踏まえ、より視認性に優れた対応可能言語の表示や、翻訳アプリの活用方法に関する丁寧な説明などについて対応していくことが必要である。
なお、都内で活動したボランティアのうち 1,069 人は、RWC2019の知見・経験を活かして東京 2020 大会のシティキャストとしても活動する予定である。



- ・ 交通輸送
交通輸送については、入退場時の混雑緩和を図るため、京王電鉄（株）など公共交通機関による特急電車の臨時停車や臨時列車の増便、シャトルバスの運行などにより対応した。こうした対応を行うに当たっては、準備段階から交通事業者、警視庁及び地元自治体等との緊密なコミュニケーションを図ることが重要である。
- ・ 都市装飾
台風上陸時の経験から、暴風時における街灯フラッグの破損を避けるため、フラッグを取り付けるバーなどに巻き付け、固定化することで破損を未然に防ぐことなどの対策が有効である。
- ・ 多言語対応
試合会場等に来場した外国人の声を踏まえ、案内表示の整備や翻訳ツールの利用など、一層の多言語対応の推進が必要である。
- ・ 台風対応
台風 19 号上陸時には、ファンゾーンの開催中止、開始時間の変更などを行っており、その際には、気象情報を収集しつつ、組織委員会、地元自治体、公共交通機関と緊密に連絡を取りながら対応した。非常時において、柔軟かつ迅速に対応ができるよう、あらかじめ関係機関との連絡体制を構築していくことが求められる。
- ・ その他
今後、東京 2020 大会の準備の過程を通して明らかになる共通課題については、RWC2019 の運営実績を参考にしながら検討していく。

RWC2019 の成功に向けて、こうした知見のほか、様々な主体と連携・協力して行ってきた大会準備や大会期間中の取組を貴重なレガシーとして、目前に迫る東京 2020 大会に活かし、成功につなげていく。

